悪魔を汚せ

高木登

08/11/23 改訂

登場人物

美樹本謙人（二一）　春野夫妻の長男
美樹本一季（一九）　長女
美樹本佐季（一八）　次女

美樹本春野（四九）　美樹本家の長女
美樹本大助（五三）　春野の婿

美樹本夏彦（四三）　長男
美樹本笙子（三九）　夏彦の妻

美樹本秋良（三七）　次女
美樹本保雄（四〇）　秋良の婿

美樹本冬子（三一）　三女

御子柴徹（五五）　美樹本製薬総務部部長

「家ってなんや？」

尼崎連続変死事件の主犯・角田美代子がノートに書き残した言葉

そこは広壮な純和風建築、二階建ての一階。
都内の閑静な住宅街の一角にある。

美樹本家は昭和初期からつづく製薬会社の創立一族で、それなりの名家である。だが娘婿の大助は名ばかりの専務であり、長男の夏彦、次女秋良の入り婿、保雄はいちおうの管理職であった。
もはや経営の実態は一族外の社員たちによっておこなわれており、美樹本家の主収入と体面は会社の大株主としてのものによっている。

舞台上は清潔だが、どこか古びていて、没落の様相がうかがえる。

上手側に広い居間。屋敷のなかでも公的な空間で、一族はここで一堂に会することがしばしばある。

下手寄りに中庭。

中庭の奥にははなれのような一室があり、ここが謙人の部屋である。障子を開閉して中庭を見下ろすことが出来る。

秋。

一、

場内がまだ暗いなか、謙人が現れる。

謙人　こんにちは。僕は美樹本謙人といいます。大学を中退して職にも就かずにぶらぶらしているニートです。これからご覧いただくのは僕の家族の物語です。美樹本家は長女の春野、長男夏彦、次女秋良、三女冬子の四姉弟を中心にした家で、僕は長女の春野の子供です。下に妹が二人います。有名な製薬会社の創業者の家系なんですが、昔ほどの勢いはありません。大株主だから体面保ってますけど、経営はほとんど他人任せです。ま、むしろ健全かもしれないですね。

皆さんにとって、家族ってなんでしょう？　僕にとっては唾を吐きかけたくなるようなものです。僕は彼らが嫌いだし、この家に生まれた自分が嫌いです。これから嫌というほど僕の家族の内側をご覧いただきます。理解できない方、共感できない方、信じられないという方、はたまたとってもよくわかるという方、いろいろおられるとは思いますが、なんでわざわざそんなものをお目にかけるのか――それに関してはあえて黙っておこうと思います。

しばし沈黙。

謙人　聞きたいですか？

会場の様子をうかがい、

謙人　じゃあ言います。人を傷つけずには生きていけない、哀れな人間たちの姿を見せつけて、皆さんが傷つくところが見たいからです。傷ついてうんざりしてるあんたたちの顔が見たいからです。僕はそんなに良い人間じゃないんですよ。騙されないようにしてくださいね。それでは最後までお楽しみください。

と、はなれに入る。

戸が閉まる音と同時に暗転。

二、

暗転を引き裂くような悲鳴とともに照明が点く。

ある朝。

震えている秋良。

中庭にある何かから目を背けている。

兄の夏彦がやってきて、

夏彦　（それに気づいて、立ち止まり）……え？

秋良　やだ、兄さん片付けてよ！

夏彦　なんで俺が……もう着替えちゃったしさ。

秋良の婿の保雄が来る。

保雄　（見て）……誰がやったんだ？

秋良　知らないわよ！　ねえ、とっとと片付けてよ、あんたたち男でしょう！？

保雄　……やるよ。

秋良　（苛立ちながら）早く！　この程度の役には立ってよね。

保雄　（苦々しい顔をして）……。

夏彦　……事故？

保雄　（しゃがんで見て）さあ……。

夏彦　保雄くん、警察に届けた方がいいんじゃないかな。

秋良　もうなんでもいいから片付けてよ！

夏彦　なんでもよくないだろう。
保雄　部屋に戻ってろよ。後はやるから。
秋良　うちの庭が汚されてんのよ、それがいやなのよ、はっきりきちんと片付いたことがわからないと私の心は落ち着かないのよ、だから早く片付けて！

笙子が来る。

笙子　（一同の様子を見て）……どうしたんですか？
夏彦　おまえは見ない方が良いよ。
笙子　え、なに？
秋良　（中庭を示して、冷たく）猫が死んでんのよ。
笙子　――。

庭にあるものに気づいて夏彦に抱きつく。

笙子　（泣いて）……やだ。
夏彦　（その肩を抱いて）向こうに行ってなよ。俺と保雄くんで片付けるから。
笙子　……わたし、やる。
夏彦　無理すんな。
笙子　やる。

と、庭に降りていく。

そしてさらに目を背ける。

秋良　笙子さんエラいよねえ。長男の嫁の自覚がしっかりあるもん。

保雄　義姉さん、ほんとに無理しないでください。
笙子　可愛がってたから。
夏彦　任せろよ、俺たちに。
笙子　可哀想だから。
秋良　やるって言ってんだからやらせりゃいいじゃん。
保雄　おまえは黙ってろよ。
秋良　笙子さんには優しいのね。
保雄　（言葉に詰まり）……。
夏彦　……なんか箱持ってくるよ。

と退場。

しゃがんで猫の死体をおそるおそるのぞき込む笙子。

秋良　ねえ、やるって言ったんだからさ、とっとと片付けてくれないい？
笙子　……刃物。
秋良　は？
笙子　なにか、刃物でお腹がまっすぐ切り裂かれてる。
秋良　気持ち悪い、勘弁してよ。
笙子　だから内臓が飛び出てる。
秋良　やめてったら！　あんた頭おかしいんじゃないの？

大きめのダンボール箱を持って戻ってくる夏彦。

つづいて来る春野と大助。

春野　なんなの？

秋良　猫。死んでんの。
春野　（庭を見て）誰？　誰がやったの？
秋良　さあ。
春野　笙子さん、あなた？
笙子　まさか、
春野　他に誰がいるの？
夏彦　姉さん、そういう言い方はないだろ？
春野　だって、この人しかいないじゃないの。
大助　春野さん、決めつけは良くないよ。
笙子　わたし、こんなことしません。
春野　なら証拠を見せなさい。ないでしょう？　ないならあなたじゃないの。
夏彦　姉さん、いいかげんにしてくれよ。
大助　笙子さんがそんなことする必要がないだろ？　よく考えてごらん。おまえ、おかしなこと言ってるよ。
春野　父はね、本当に酷い人だったの。

一同、またかとばかりにうんざりとなる。

春野　ほとんど家に帰らないで、たまに帰ってくると思ったらわたしのことをぶって、殴って、それで愛人の家に戻ってくような、本当に酷い人だったの。私はものすごく苦労したの。だから病気になんかなるのよ、天罰です、因果は巡るのよ。
大助　その話は何度も聞いたよ。
春野　だからこの人に決まってるじゃないの。他に誰もいないんだから。
保雄　大人がやったこととは思えません。
春野　この人がいるじゃないの。

保雄　謙人君たちにも聞いてみるべきじゃないですか？
春野　いちばんに疑うべきなのは外の人でしょう？
秋良　姉さんの子供が怪しいって言ってんのよ。あたしも賛成。
春野　何言ってるの？　（笑って）あの子たちがこんなことするはずないじゃないの。あたしの子なんだから。あたしがお腹を痛めて産んだ子がこんな真似するはずないでしょう？　そうじゃない人間がやったんです。うちの人間じゃない人がやったんです。保雄さん、あなただって怪しいものですよ。入り婿なんだから。
大助　僕だって入り婿ですよ。
春野　あなたにこんなことする度胸ないでしょう？
大助　はい。
夏彦　姉さん。謙人たち呼んでこようよ。
春野　そんな必要ありません。
大助　話聞くだけでも聞いてみたらいいん（じゃないかな）……
春野　必要ありません！

一同、黙る。

春野　あの子たちを疑う気持ちがあったら、あなた（笙子）が反省なさい。わたしが悪いと言ったら悪いんだから。あなたに反論の余地なんてないんだから。
大助　（悪いね、とばかりに保雄と笙子にジェスチャー）
秋良　ごめんね、こんな頭のおかしい人がいる家で。あたしもこんな家に生まれてきたくなかったんだ。でもね、あんたたちは好きで入ってきたんだからさ。選んでここに来たんだからさ。いろいろ引き受けてよ。この人の頭のおかしさも、何もかも。
春野　だから私たちのお父さんはね、家のことなんてなんにも考え

ないような人だったのよ、
秋良　だったら今すぐたたっ殺してきなよ。どうせ寝たきりなんだからさ。
春野　わたしがこんなに具合が悪いのも、
秋良　（さえぎって）ああ、あのクソ親父のせいだよ！　（笙子に）ねえ、とっとと片付けてよ！　早く！
笙子　……ここに埋めたらダメですか？
秋良　は？
笙子　庭に埋めたらダメですか。
秋良　あんた、どうかしてんじゃないの？　そんな汚らしいもん家の庭に埋めるなんて、
夏彦　清掃局に言えば持っていってくれるんだよな。
大助　でもそれ、あきらかに殺されてるよね？
夏彦　……はい。
大助　そういうの、公の機関に渡したらマズいんじゃないの？　通報されたりとか。
夏彦　されますかね？
大助　だって虐待でしょ、それ。だったら公共の機関はマズいんじゃないの？
保雄　……ペット霊園とか。
大助　人目はマズいんじゃないのかなあ。庭に埋めるのが合理的ですよ。ねえ、笙子さん。
笙子　……わたしはただ、ここで育った子だからここで土になるべきだと思っただけです。
秋良　庭に猫の死体が埋まってるなんて、想像するだけで吐き気がするんだけど。（思いついたように）冬子が拾ってきた猫なんだからさ、冬子に引き取ってもらおうよ。
夏彦　その方がマズいだろう。

春野　冬子は母親が違うからおかしくなったのよ。
大助　春野さん、そういうこと言わない。夏彦君、保雄君、そろそろ会社。車来てますよ。
夏彦　わかりました。とりあえず箱入れといてさ、帰ってからやろうよ。
笙子　わたし、やっておきます。
保雄　女手だけじゃ無理ですよ。
秋良　やるっつってんだからやらせなよ！　わたしヤだからね！
保雄　（大助と夏彦に）先に行ってください。ぼくはお義姉さんを手伝ってから行きます。
大助　遅刻じゃないの。
保雄　どうせ行ってもたいしてやることないですから。
大助　保雄君、それ言っちゃオシマイ。堂々としてりゃいいんだよ。うちの会社なんだから。
保雄　（苦笑して）行ってください。堂々と遅刻して行きますよ。
大助　そーお？　じゃあ行こうか、夏彦君。
夏彦　はい……（保雄に）じゃあお願いします。
春野　こんな人の肩持って……（秋良に）だから別れろって言ったのよ……！
大助　わかったわかった、行きましょう春野さん。

と強引に連れて行く。

秋良　頼んだわよ。（と退場）

残った保雄と笙子。

笙子　お線香……持ってきていいかな。

保雄　あ……そうですね。じゃあ、僕はスコップを……。

母屋の方に退場する笙子と、庭の奥に去る保雄。

ややあって、はなれの襖が開く。

謙人と佐季、庭をのぞいて、

佐季　シロも殺され損だね。

謙人　シロ？　あの猫、そんな名前だったのか。

佐季　知らない。わたしはそう呼んでた。

母屋から一季がやってくる。

一季、庭の様子を見て顔をしかめ、はなれを見る。

はなれの二人とはぎこちない距離感があるように見える。

一季　……あんたたちがやったの？

二人、無言。

一季　どうなの？

謙人　イエスでありノーだな。

佐季　兄さんが飽きたって言うから、猫でも殺したらって。

一季　飽きた？

佐季　口ばっかりでなかなかやろうとしないから、私がやっちゃっ

た。

一季　……猫を殺す理由にはなってないと思うけど。

佐季　生きる理由なんてないんだから死ぬ理由もないよ。あの猫はこうなる運命だったんだよ。無駄死にだったけど。

謙人　無駄かどうかはわかんないだろ。ささやかに何かが変わるかもしれないって思ってるんだ。ちょっとした希望を感じてるんだ。それならあの猫にだってこの家で飼われた意味もあるんじゃないかな。

一季　あんたたちに殺されるいわれはないよね。

謙人　一季。おまえはなんでそんなに善良なんだ？

一季　わたし、善良ぶってるつもりはないけど。

謙人　ぶってるならまだわかるけど、おまえ、ほんとに善良だよな。

（佐季に）すごくないか？

佐季　すごい。ていうか、なんでそんな風になれるのかわからない。普通にいい人。

一季　普通にいい人の何が悪いの？

謙人　悪くはないけど損するぜ。世の中腹黒い奴であふれてるんだ。こっちの腹も黒くしなけりゃやってけないよ。

佐季　いじめられる前にいじめないとね。わたし、学校ではそうしてる。

謙人　正しいよ、佐季。でもな、一季も一季で尊いんだ。俺も昔は善良であろうとしたよ。でも挫折して今があるんだ。一季はまだ挫折してない。闘ってんだ。世の中の悪と闘ってんだ。一季は正しいよ。何も間違ってないよ。ただ痛々しいよ。それがね、なんか気の毒に見えるんだよ。

一季　いいかげんやめて、こういうこと。わたし、もううんざりだよ。

謙人　これが生きがいだからなあ。

佐季　あの人たちが右往左往してるの見るの、楽しいじゃん。
一季　楽しくないよ。
謙人　おまえがいちばんわかってくれるはずだろ？
一季　わかるわけないじゃん。
謙人　そんなはずないだろ？
一季　わからない、わかりたくもないよ。

そこへ、小さなシャベルを持って戻ってくる保雄。

三兄妹を見て、

保雄　……おはよう。

三人それぞれに「おはようございます」と言う。

保雄　猫が殺されてね。
謙人　らしいですね。
保雄　君たち、何か知らないか？
謙人　ぼくは何もわかりません。
佐季　知りません。
保雄　一季ちゃんは？
一季　……わかりません。
保雄　……そう。

火の点いた線香の束を持って笙子が戻ってくる。

笙子、保雄のシャベルを見て、

保雄　……スコップが見つからなくて。
笙子　……小さいですね。
保雄　はい……やっぱこれじゃ無理ですよね。
謙人　スコップなんてないですよ。庭は業者任せだから。
保雄　そうか……参ったな。（笙子に）僕、買ってきます。
笙子　いいんですか、会社。
保雄　平気ですよ。なんなら休んだってかまいません。
謙人　うらやましいなあ。僕もそんな立場になりたいですよ。

謙人の慇懃な態度に憮然として、

保雄　みんなが忙しくしてるなかで、ろくな仕事も任されずに、ただ大事にされてるだけって、とてもつらいことだよ。そんな立場がうらやましいか？　俺は職にも就かずにぶらぶらしてる君の方がよっぽどうらやましいけどな。
謙人　普通に会社行って給料もらえるなんて最高じゃないですか。しかもたいして働かなくていいんでしょう？　僕は働かないで家に寄生してるだけの人間ですよ。最低ですよ。うらやましがらないでください。働かないで稼いでるなんて最高です。理想ですよ。
保雄　（じっと謙人の顔を見て）……。
謙人　皮肉じゃないですよ。
保雄　（シャベルを置いて）……買ってきます。

と、庭から上がって、

保雄　猫のこと、聞いときました。何も知らないそうです。
佐季　その言い方だと、なんか私たちが嘘ついてるみたいじゃない

ですか。

佐季を一瞥して、そのまま退場する保雄。

笙子　学校、行かないの？

佐季　どうしよっかなー。

笙子　ずっと休んでるじゃない。大事なときでしょう？

佐季　あんたに言わなきゃダメ？

笙子　……。

笙子、庭に降りてしゃがみ、箱の前に線香を供え、手を合わせる。

佐季、ふいに笙子に向かって鉛筆を投げる。

当たるが、何も言わずに手を合わせている笙子。

もう一本、鉛筆を投げる佐季。

一季　やめなよ……！

当たるが、何も言わない笙子。

佐季　その人がやめろって言うまでやめない。

と、また鉛筆を投げる。

一季、はなれに入っていく。

佐季から鉛筆の束を取りあげて、

一季　やめて。気分悪いよ。

佐季　なんにも言わないこの人もイヤだし、他人のことでそんなことできるお姉ちゃんもイヤ。

一季　黙って見てる方がおかしいでしょ？

笙子　気にしないで。わたしはかまわないから。

謙人　そういう態度だから佐季がつけあがるんですよ、叔母さん。大人は大人らしく、もっと毅然としてないといけないんじゃないかな。時には怒ったり、厳しい態度を見せないとダメなんじゃないかな。じゃないと子どもは僕みたいなニートになるんですよ。甘やかしちゃダメですよ。

楽しげな謙人。

痛ましいような顔で佐季を見ている笙子。

佐季　……なにその顔。

謙人　叔母さんは優しいなあ。おまえ、あれは哀れんでる顔だぞ。おまえのような人間は救いようがないって思ってる顔だよ。見下してる顔だよ。

佐季　……（憮然と）わたし、学校行く。

と退場。

何か言いたげな一季を見て、

謙人　手伝いませんよ。叔母さん、汚れ仕事はね、最底辺の人間がやることなんですよ。叔母さんが自分でそれをやるって言ったってことはね、自分がこの家で最底辺だって宣言したようなもんなんですよ。だから佐季みたいな小娘にも舐められるんですよ。

一季　（怒気混じりに）兄さん！

謙人　俺は忠告してんだよ。叔母さん。母や秋良伯母さんみたいな連中と張り合うにはね、優しさじゃ勝てないですよ。ま、一生それでいいんならかまいませんけど。じゃ、僕は無職のニートらしく寝ます。失礼。

と、音立てて障子を閉める。

一季　……ごめんなさい。

笙子　……なんで一季ちゃんが謝るの？

一季　わたしが謝らないと誰も謝らないから。

笙子　（苦笑）

一季　叔母さん、家出ないんですか？

笙子　……どういうこと？

一季　わたしならこんな家とっくに出てるなと思って。

笙子　そんな簡単にいかないわよ。

一季　でも冬子叔母さんは出て行きましたよ。

笙子　わたしにも出てけってこと？

一季　いる価値がある家とは思えません。

笙子　それはわたしが決めることです。

一季　じゃあ決めてほしい。まともな人がこの家で苦労してるのを見るのがつらいから。

笙子　一季ちゃんはどうなの？　出て行かないの？

一季　すぐにも出たいです。
笙子　じゃあなんでそうしないの？
一季　……自由になるお金もないし、まだ……。
笙子　お金はわたしが出してあげるって言ったら？
一季　……え。
笙子　どうする？
一季　（迷い）……。
笙子　そういうことだよ。簡単なことじゃないよ。

突然、塀の向こうから石つぶてが飛んでくる。

驚く二人。

拾う笙子。

塀の向こうをのぞいてみる一季。

一季　……誰もいない。

石は紙で包まれている。

広げてみる笙子。紙は汚らしく汚れている。

一季　（来て）……なんですか？

障子を開けてうるさそうに顔を出す謙人。

紙を見せる笙子。

そこには大きく「猥」と書かれている。

笙子、一季、気味悪げに顔を見合わせて――。

謙人　……誰がやったんですかねえ。佐季かな。保雄叔父さんかな。

一季　（咎めるように）兄さん……！

謙人　思い当たる人が多すぎて。でも猥褻の「猥」なんて、けっこう年食った奴の仕業かもしれないですね。二人ともさ、出て行きたかったらとっとと出てった方が良いよ。こんな家に住んでたら、どんな人間もおかしくなっちゃいますよ。呪われますよ。こんな環境で健全でいられるわけないですよ。一季、おまえも侵されてんだ。そのうちおかしくなるぞ。

一季　……。

謙人　その「猥」の字がおまえの心にシミみたいに広がってくんだ。そのうち身動き取れなくなるぞ。この家でしか通用しないダメな人間になってくんだ。

一季　ならない。わたしは兄さんとちがう。

謙人　叔母さんもですよ。気をつけてください。

はなれを出て近づいてくる謙人。

笙子の手から石を奪い、

謙人　誰が投げたか知りませんけどね、

と、あらぬ方向に投げる。

塀の向こうから激しく何かが砕ける音が聞こえてくる。

謙人　こうやって誰かに投げ返してやればいいんですよ。やられた誰かも誰かにやり返せばいい。悪意なんてそんなもんですよ。

暗転。

三、

照明が点く。

その日の夜。

座敷に一季、佐季、謙人、大助、夏彦、保雄、秋良、笙子が集まっている。

テーブルの上には「猥」の紙。

夏彦　イタズラだろう。

一季　なんでウチなんですか。

夏彦　どこでもよかったんじゃないのか。気にすることはない。

大助　それよりおまえ（謙人）が投げた石が佐藤さん家の鉢植えを壊したことの方が問題だよ。

謙人　すいませーん、反省してます。

夏彦　謙人。おまえ猫殺しも何か知ってるんじゃないのか？

謙人　それは知りません。そんなこと出来るわけがないじゃないですか。僕はネズミも殺せないですよ。

夏彦　白々しいな。

謙人　そんなことないですって。

夏彦　お母さんはごまかせても俺たちは無理だぞ。

謙人　ぜんぜん信用してくれてないんですね。母さん呼んできてください。

大助　薬で寝てるよ。いたら真面目な話にならないの、おまえもわかってるだろう？　夏彦君、さすがに謙人も猫は殺さないんじ

ゃないの。

夏彦　むかしからインコや金魚が突然死んだりいなくなったりしたじゃないですか。

大助　生き物なんてそういうもんでしょうよ。

夏彦　お義兄さん、お言葉ですが、こいつらが物心ついたくらいからですよ。そういうことが増えたのは。

大助　夏彦君だって子供の頃に虫殺したりいじめたりしたでしょう？

夏彦　でも隠さなかったですよ。こいつらがタチ悪いのはね、隠すんですよ。陰でやって、こっちの様子をうかがってるんですよ。あきらかに悪意を感じるんですよ。

佐季　なんの証拠があるんですか？

夏彦　そうやって証拠を出せと言ってくるようなところに悪意を感じるって言ってるんだ。

佐季　確証もないのに犯人扱いはないんじゃないですか？　そんなむちゃくちゃな話ないんじゃないですか？

保雄　消去法だよ。他に誰がいるんだ？

佐季　……信じらんない。なんでこんなに話が通じないんだろ。

秋良　ねえ、わたしここにいなくちゃダメ？　出かけたいんだけど。

夏彦　家のことだ。大事なことだろ。

秋良　わたしは別にこの子たちの保護者じゃないんだからさ。行くね。（と立ち上がる）

夏彦　おい！　おまえもいいかげん大人になれよ！

秋良　身内にだけ強がるの、やめてくれる？　（保雄に）頼んだわよ。

夏彦　秋良！

と退場。

保雄　……もうしわけありません。
夏彦　……保雄君、もっと強く出てくれてかまわないよ。気は遣わないでくれよ。
大助　夏彦君、ぼくらみたいなお婿さんはね、そうそう強気にはなれないですよ。この歳になってもまだまだ自分の家だとは思えないもんなあ。
保雄　（苦笑して）……はあ。
佐季　あの、ちょっと聞いて良いですか？
大助　なに？
佐季　なんでみんな我慢してるんですか？　父さんや夏彦叔父さんからしたら妹だし、保雄叔父さんは夫でしょ？　強引にでも言うこと聞かせればいいだけのことだと思うんだけど。
夏彦　大人のやることに口を出すな。
大助　ぼくからすりゃ何も言えませんよ。秋良さんはこの家の人だからね。出て行きたい、ああそうですかってなもんですよ。
夏彦　お義兄さん、子供の前でそれはないんじゃないですか。
大助　正直だけが取り柄なんでね。それはこの子たちにも伝えたいんですよ。裏も表もない人間になれってね。
佐季　わたしの目にはみんなただのヘタレに見えるんですよ。それについてはどう思いますか？
夏彦　……口が過ぎるな。
大助　いいんじゃないの。強い大人なんて幻想ですよ。佐季も佐季で正直すぎるだけでね。（子供たちに）いいか。おまえたちは利口だ。利口に育った。だが知恵がない。利口だけでは生きていけないんだ。知恵をつけなさい。こういうことを言うと人が傷つくとか、怒るとか、だから言わずに黙っておこうとか、そういう知恵を身につけようよ。

佐季　（ため息）
大助　なんだ、佐季？
佐季　べつに。
保雄　正直に話してくれないか、猫のこと。一季ちゃん、本当に何も知らないのか？
一季　……。
夏彦　こいつらを庇う必要なんてないんだぞ。
佐季　おかしくないですか？　わたしたちのことは端から疑ってるのに、なんで姉さんは違うんですか？
謙人　人望がないからだよ。
佐季　せめて家の人には公平に扱ってほしいな。
一季　知りません。
謙人　正直に話せよ、一季。
夏彦　黙れ、謙人。本当に知らないんだな？
一季　……はい。
夏彦　一季。庇った人間も同罪だぞ？
大助　本人が知らないって言ってるんだから仕方ないよね。
夏彦　お義兄さん、もっと子供たちを追い込んだ方がいいんじゃないですか？
大助　怒鳴ったり殴ったりしろってこと？
夏彦　そこまでは言いません。でも……
保雄　笙子さんに対する態度が酷いんです。謙人君と佐季さんは。

黙っている笙子。

夏彦　……（笙子に）本当か？
笙子　（なにも言わない）
夏彦　（謙人と佐季に）どうなんだ？

佐季　普通。
夏彦　普通ってなんだ？
佐季　普通に人として接してあげてるだけだけど。
保雄　言葉遣いも態度も年長者に対するものではありません。
佐季　ちなみに保雄叔父さんにも普通に人として接してあげてます。
保雄　（顔色変えて）……俺のことはいい。でも笙子さんに対する君たちの態度はひどい。とても「普通」じゃない。
謙人　佐季はともかく僕はそうでもないけどなあ。
佐季　兄さんが認めてどうすんのよ。
謙人　おまえの巻き添えになりたくないんだよ。
夏彦　事実なんだな？
佐季　だから普通。
夏彦　（笙子に）どうなんだ？
笙子　……わたしは平気です。
夏彦　平気ってことはそういうことがあるってことか？
笙子　身内だから、ちょっと言葉が乱暴になるときもあるんだと思います。
保雄　笙子さん、はっきり言うべきですよ。
笙子　わたしは大丈夫です。
夏彦　おまえ、本当なら正直に言ってくれよ。
佐季　本当だったらどうなるんですか？　わたしたちのことぶつんですか？　殴るんですか？　それとも叱って終わりですか？
夏彦　黙れ。
佐季　夏彦叔父さんならたぶん叱って終わりですよね？　そんなことだからこの人もなんにも言わないんじゃないですか？　叔父さん、陰でみんなに頼りにならないって言われてるの知ってます？

顔色変えて佐季の前に立つ夏彦。

佐季　ぶてば？

だが、しない夏彦。

夏彦　……子供の頃からおまえを可愛いと思ったことはない。肉親の愛情を感じたこともない。だからぶつ気にならないんだ。わかるか？

佐季　……。

夏彦　この先なにがあろうと俺を頼りにするな。俺はなにもしない。おまえを家族とは思わない。いいな？

佐季　……わたし、なんにも困らないんだけど。

憮然としてその場を去って行く夏彦。

笙子、会釈して夏彦についていく。

大助　だから言っただろ、ああいうことは言っちゃダメだって。

謙人　父さん、なんで止めないんですか？

大助　夏彦君にもプライドがあるからね。

佐季　あの叔父さんに？　プライドが？

大助　あるんだよ。だれにでもある。笙子さんにもある。だからおまえたちを悪く言ったりしないわけだよ。そこに甘えちゃいかんな。

佐季　父さんも信じてくれないんだ。

大助　おまえたちのことは誰よりもわかってるつもりだよ。

沈黙で答える子供たち。

保雄　けっきょく何もしないんですか？

大助　われわれに出来ることはね、ただ言葉を投げかけることだけですよ。言うこと言って、それがこの子らの中でどう育つか、じっと待つしかないんですよ。ま、気長に見守りましょうよ。

と立ち上がって、

大助　利口なおまえたちなら、わかるはずだよな？

大助、退場。

保雄　（大助が行くのを待って）……一季ちゃん。君が黙ってるのもプライドか？

一季　……。

保雄　俺は何かを守るためならプライドなんか捨てた方が良いと思ってる。君に押しつける気はないけど、時にはそういう姿勢も必要だと思う。

謙人　……やっぱ保雄叔父さんは言うことがちがうな。まともですよ、まとも。この家に置いておくのがもったいないくらいです。

保雄　……さっきお父さんが言ったことを思い出せ。

謙人　僕、利口じゃないから。

保雄　……。

保雄、退場。

佐季　（保雄が去るのを待って、露骨に体勢を崩し）あーあ、けっきょくなんでもないでやんの。だから舐められんだよ、あの人たちは。
謙人　おまえ、なんで俺たちのこと庇うんだ？
佐季　そうだよ。わたしたちにまで良い人ぶる必要なんてないのにさ。
一季　……あんたたち、それで変わる？
佐季　変わんない。
一季　だからだよ。
謙人　俺たちが変わんなくても、あの人たちは変わるかもしれないだろ。
一季　……あの紙、佐季がやったの？
佐季　知らない。わたしだったら直接誰かにぶつけてるわ。
謙人　だからあれは若者の発想じゃないって。父さんあたりが誰かに恨み買ったんじゃないかな。
佐季　冬子叔母さんとか。
謙人　かもな。
一季　……わたし、怖いんだ。うまく言えないんだけど。
謙人　どういうことだ？
一季　わたしたちには見えないところで、なにかもう取り返しがつかないことが起きてるような……そんな感じ。
佐季　なに言ってんの？
一季　……ごめん。うまく言えない。
謙人　ようするにこんな家庭には天罰が当たるかもって話だろ？
一季、おまえ宗教にだけはハマるなよ？
一季　わたし、兄さんや佐季がそういう態度なの、本当にいやなの。みんな傷ついてるんだよ？　みんな我慢してるんだよ？　な

のに身内だからってなんとかしてくれようとしてるんだよ？
なんでそんなに素直じゃないの？　楽しそうなの？
謙人　覚えてるか？　子供の頃、お祖父様がおまえの身体を触って
――。
一季　（さえぎり）やめて。
謙人　俺は忘れないぞ。みんな笑って見過ごしたんだ。誰も怒らな
かったし、誰もとめようとしなかった。あいまいにやり過ごそ
うとしたんだ。
一季　やめてよ！　……わたしが悪いんだよ。お祖父様もちょっと
からかうくらいのつもりだったんだよ、
謙人　おまえのどこが悪いんだよ。どう考えてもあの爺さんが悪い
だろ？　あきらかにそういうつもりでおまえに触ってたぞ。
佐季　わたしも触られたよ。いまでも触ってくる。ボケてるくせに、
まだ性欲あるんだと思って。笙子叔母さんや秋良叔母さんも触
られてるんじゃない？　なんでみんな黙ってんだろうね。男の
人たち、気づいてないのかな？
謙人　とっくの昔に気づいてるよ。気まずいから黙ってんだ。事
を荒立てたくないから何もしないでやり過ごしてんだ。
一季　（涙を流す）
佐季　姉さんさ、ひとりで泣いてたってどうしょもないじゃん。正
直イラッとするんだけど。
一季　……あんたたちみたいに反抗したって何も変わらないってわ
かってるからだよ。
謙人　そうじゃないよ。おまえもあのとき笑ってやり過ごしたから
だよ。おまえが泣いたり叫んだりすれば何かが変わったかもし
れないんだよ。でもおまえは全部呑み込んだ、だからなにも変
わらなかったんだよ。
佐季　姉さん、間違ってるよ。変わらないんじゃなくて変えるんだ

よ。変えてやるんだよ。
一季　無理だよ。
佐季　わたしが証明してあげる。ここまでやればいろんなことが変わるんだって、わたしが教えてあげるよ。
謙人　おまえ、ずいぶん自信があるんだな。
一季　もし変なこと考えてるならやめて。なにもしないで。
佐季　やだ。楽しみにしてて。姉さんに新しい世界をプレゼントしてあげる。
一季　……そんなのいらない。
謙人　おまえ、妹の厚意はありがたく受け取っとけよ。
一季　いらない……！

微笑む佐季。

見返す一季。

暗転。

四、

照明が点く。

数日後、当主の告別式が終わった後。

居間の縁側に喪服姿の笙子が立っている。

以後、この場の登場人物は全員喪服である。

入ってくる夏彦。

夏彦　どうした？

笙子　……少し疲れただけです。

夏彦　すまないな、苦労かけて。あいつら、おまえを家政婦だと思ってやがる。

笙子　自分の家族のこと、そんな風に言わないでください。

夏彦　愚痴くらい言わせてくれよ。親父が死んでホッとしてんだ。

笙子　お葬式の日に言うことじゃないです。

夏彦　おまえがいちばん苦労してたんだぞ？

笙子　……どんな人でも亡くなるのは悲しいです。

夏彦　……どこまで人が良いんだよ。

笙子　そんなに嫌なら、出ましょうよ、この家。

夏彦　……え？

笙子　出ましょう？　その方があなたのためじゃないですか？

夏彦　長男が家を出られるかよ。姉さんもあんなだし、出て行けるわけないだろ？

笙子　考えすぎじゃないですか？　家よりも、もっと自分のこと、考えて良いんじゃないですか？
夏彦　……普通の家庭に生まれてたらな。
笙子　子供作りましょう？
夏彦　……。
笙子　家を出て、子供作りましょうよ。そうすればあなたの気持ちも少しは変わるかも……。
夏彦　子供はダメだ。
笙子　どうして？
夏彦　とにかくダメだ……！

保雄と秋良が来る。

秋良　何、喧嘩？
夏彦　ちがう。
秋良　正直肩の荷が下りたわ。いいときに死んでくれたよ。これ以上介護だなんて。（笙子に）ねえ？
保雄　やめろよ。
秋良　やめない。ねえ、けっきょく冬子来ないの？
夏彦　ああ。
秋良　あいつ親の葬式にも来ないってすごくない？　わたしでも出たのにさ。
夏彦　冬子はもう家の人間じゃない。
秋良　兄さん、喪服脱いで良いよね。疲れちゃってさ。
夏彦　ちょっと待ってろ。話がある。

そこへ、総務部長の御子柴が入ってくる。

御子柴　（会釈して）だいたいお帰りになりました。あとはもう部下にやらせますので。
夏彦　ありがとうございました。
御子柴　いえ。例の件なんですが……よろしいでしょうか？
夏彦　……はい。（一同に）ちょっとここにいてくれるか。俺、みんな呼んでくるから。

一同、なんとなくうなずく。

夏彦、退場。

そこへ入れ違いに謙人と佐季が来る。

謙人　（御子柴に会釈して）ありがとうございました。総務の方ってたいへんですね、人の家の葬式であそこまでしてくれるなんて。
御子柴　会社は大きな家族みたいなものですからね。
謙人　家族！　そうか……そういうもんか。
佐季　だから人前で旦那さんのことを罵ったり、イヤミ言ったりするような人もいるわけですね。
秋良　あんた、ケンカ売ってんの？
御子柴　今日は会長のご葬儀の日です。皆さん、もうすこし優しい言葉をお使いになった方がよろしいと思います。
謙人　御子柴さん、大人だなあ。いっそ毎日うちに来てくださいよ。そういうこと言う人が誰もいないんですよ。メチャクチャなんですよ、もう。
御子柴　坊ちゃん。人を傷つける言葉は自重してください。
謙人　だからそういうところですよ！　そういうところに感心する

んですよ。
御子柴　坊ちゃん。
謙人　……はーい。

夏彦に連れられて一季が来る。

つづいて大助と春野。

大助　部長、どうもご苦労かけてしまって。
御子柴　いえ、この程度のお役にしか立てなくてもうしわけございません。
春野　この人たちが子供を作ってくれさえすれば会社の人の手なんか借りずに済むんです。
大助　はい春野さん、黙って。
春野　子供が出来ないなら他の人に取り替えれば良いのに。
大助　春野さん！

保雄、笙子、聞かない顔をしている。

御子柴　皆さん、お集まりですね。あらためまして、このたびはご愁傷様でした。（と頭を下げる）

一同、それぞれに頭を下げる。

御子柴　本来でしたら日をあらためるべきなんですが、一日も早くお伝えした方がよろしいかと思いまして、こうしてお集まりいただいた次第です。
謙人　遺産の話とかですか？

御子柴　それは弁護士さんの管轄です。
謙人　なんだ……ちがうのか。
春野　良い話ですか、悪い話ですか？
御子柴　……どちらかというと悪い話です。
春野　子供たちに聞かせる必要があるんですか？
御子柴　私はあると考えました。
春野　この子たちに何か悪い影響があったら責任はとってくださるんでしょうね？
大助　春野さん！　部長、ごめんなさいね。この人、猜疑心が強くて。
春野　あなたは人を信用しすぎるのよ。
大助　まあまあ。部長、お任せします。
御子柴　……恐縮です。（一同に）会社というものは面倒なものでして、体面がしっかりしていないと商売が成り立ちません。その体面をなんとかして保つために日々働いているのが私たちです。時には見たくもないものを見たり見せたりしなければならないときもあります。
春野　とどのつまりは何が仰りたいんですか？
御子柴　失礼いたしました……実は先日会社に妙な手紙が届きました。その内容が不穏でして。いわゆる怪文書というやつです。
大助　初耳だなあ。
御子柴　うちのセクションでも限られた者しか知っておりません。内容が内容ですので専務にご報告するのは控えておりました。
夏彦　美樹本の人間で読んだのは僕だけです。
御子柴　それもお見せしたのは昨日です。
大助　……何でそんなにコソコソしてるの？
夏彦　すみません、ちょっと普通じゃない話なので。
秋良　もったいぶらないでとっとと説明しなさいよ。

御子柴　詳しいことは申し上げられません。ただ、とても気がかりなことがひとつ書いてありました。会長が亡くなることが予告されていたんです。家の人間に殺されると。

一同、静聴。

大助　……事実ではないですよね？
御子柴　何とも申せません。
春野　痰を喉に詰まらせて死んだんじゃなかったんですか。
御子柴　志村先生にお願いして、そういうことにしてもらいました。窒息死は窒息死です。
佐季　……殺されたんだ、お祖父様。
夏彦　滅多なこと言うな。
佐季　でもそうでしょう？
一季　（佐季を見ている）
御子柴　志村先生の所見ですと、死亡推定時間は九日の朝です。
春野　笙子さん、あなた気づかなかったの？
笙子　いつもの時間に部屋に入ったときにはもう……。
春野　なんでそう役立たずなの？
御子柴　申し上げたいことがいくつかあります。正直、社は順風満帆なわけではありません。むしろ経営は苦しい。そこへ来てこのようなスキャンダルを表に出すわけには参りません。会社としては犯人捜しに興味はありません。会長は病死、それがゆるぎない事実です。その点を共通認識にしていただきたい。まずはそれがこちらからのお願いです。
大助　……部長、つまり僕たちはどうすればいいの。
御子柴　何ごともなかったようにしてください。会長が亡くなった、その悲しみだけでいつも通りに生活してください。

一季　……わたし、ちょっと無理です。このなかに祖父を殺した人がいるかもしれないわけですよね？
御子柴　いるかもしれないし、いないかもしれません。
一季　警察に届けるべきなんじゃないですか？
御子柴　それはできません。事実がどうあれ、公にすればよからぬ人間につけいる隙を与えることになります。
一季　ごめんなさい、ついていけないです。
春野　一季、あなたは悪くないのよ、ぜんぶ御子柴さんが悪いんです。
御子柴　そう思っていただいてもかまいません。ただ私どもは会社を守らなければなりません。会社を守るということは同時に皆さんの生活を守るということでもあります。お子さんたちの年齢なら、それを理解していただけると思っております。
春野　殺されようがどうしようが、あんな父親なんですから天罰です。黙って放っておけばいいんです。
御子柴　当初は放置するつもりでいました。しらを切ればいいだけのことです。証拠は何もありません。ですが、黙っているわけにはいかなくなりました。
夏彦　この手紙が取り屋に流れた形跡がある。
秋良　取り屋？
夏彦　スキャンダルをネタに企業を強請る連中のことだ。仕手筋と組まれたら厄介になる。
御子柴　最悪、手紙の内容がマスコミに流れます。
秋良　他に何が書いてあんのよ。
御子柴　ここでは申せません。
大助　何、そんなにたいへんなことが書いてあるの？
夏彦　うちとしては不愉快な内容です。
秋良　なんでそんなにもったいぶんのよ。

御子柴　言えないからです。
保雄　事実が書いてあるんですか？　それともデタラメですか？
御子柴　調査中です。
春野　あなた、ただわたしたちを不安にさせたいだけなんじゃないの？
御子柴　危機に備えていただくには必要なことです。この先なにが起きるかわかりません。人権に関わる問題ですから、新聞やテレビは報じないでしょう。でも週刊誌は書き立てるかもしれない。そうすると皆さん無事ではいられない。会社も同様です。
佐季　面白そう。
御子柴　そんなことを言っている余裕はなくなります。だから平然としていてください。この家には何もない、不穏な出来事は何も起きていない、そんなことはバカバカしい噂に過ぎない、そういう態度でいてください。
一季　無理です。
御子柴　無理でもやっていただく。どれだけ好奇の目で見られようが、後ろ指指されようが、笑われようが、心を押し殺して平然としていてください。
一季　人殺しとおなじ家で暮らすなんて無理です。
秋良　あんた真面目すぎんのよ。殺したっつってもあの親父だからね。みんな喜んでんだよ。内心感謝してんだよ。やった奴に名乗り出てほしいくらいだよ。ハグしてハイタッチだよ。
佐季　姉さん、こんな人たちの言うことなんか聞かないで、自分で警察に届ければいいんだよ。わたし、よかったらいっしょに行ってあげようか？
御子柴　佐季さん。そういうことはやめてください。
佐季　でも姉がここまで思い詰めてるんならそうした方が良いかと思って。もし祖父が殺されたんなら、犯人もそう願ってる

んじゃないですか。いまごろ良心の呵責に耐えかねて、つらい思いをしてるんじゃないのかな。
御子柴　そういう人間はそもそも人殺しなんてしませんよ。
佐季　家のためだ、会社のためだって、人殺しを隠蔽するようなことが許されるんですか？
御子柴　その人は案外今頃しめしめと思ってるかもしれませんよ。
佐季　それで良いんですか？
御子柴　はい。法やモラルの話をしているのではありませんからね。
大助　おまえ、部長は警視庁から天下って来た方だぞ。あんまり失礼なこと言うな。
御子柴　（笑って）専務、おやめください。私のようなたたき上げのノンキャリアを拾っていただいて会社には感謝してるんです。
春野　お話はそれだけですか。いいかげんみんな疲れているのでお引き取りいただきたいんですけれど。
秋良　冬子は放っとくの？
御子柴　部下がアパートにお邪魔しましたが、まだお目にかかれていない状況です。
秋良　怪文書とか石投げ込んだりとかあいつじゃないの？　どうせ恨んでんだろうからさ、あたしたちのこと。
春野　あの子は母親が違うんです。だから頭がおかしくなったんです。あんな子に何を聞いても無駄です。
御子柴　その判断はわたくしたちがいたします。しばらくは課長―保雄さんに家の中のことをお願いしますので、何かありましたら保雄さんにお伝えください。
謙人　自宅警備員ですね。僕といっしょだ。
保雄　君と違って悠長なもんじゃないよ。
佐季　姉さんはこれでいいの？　わたしは納得いかないなあ。
一季　（御子柴に）……事情は理解しました。

御子柴　ありがとうございます。

一季　けど、皆さんのことは軽蔑します。正すべきことを正せない人たちを尊敬は出来ません。

御子柴　……承知しました。それでもかまいません。いずれご理解いただけると信じております。

佐季を見る一季。

佐季、じっと見返して――。

場内ふいに暗くなり、佐季にスポットが当たる。

五、

佐季、会場に向けて語り出す。

他の一同はそのままに、御子柴は退場していく。

佐季　人を殺したことのある人は？

いないようだ。

佐季　じゃあ動物を殺したことのある人は？

これも反応がないらしい。

佐季　死体を見たことのある人。

これはちらほら。

佐季　死体って汚いんですよ。汚いっていうか、モノ。命がなくなった途端に意味があったものが何の意味もないものに変わるんですよね。小学校の時、友達がハムスター飼ってたんです。すごい可愛がってて、もう夢中だったんです。でもわたしはなんとも思わなくて、これ死んだら可愛いとかそういうのどうでもよくなるよなって思って、隙を見て盗んで持って帰って、うちの冷凍庫に入れちゃったんですよね。翌朝カチンカチンになった死体を見て、ああやっぱりなって。可愛いとか美しいとか優しいとか秀れてるとか強いとか立派だとか、そういう価値観て

全部まやかしなんだなって。全部嘘なんだって。ゴミ箱に捨てたとき思いました。わかっちゃったんですよね、小学三年生にして。だから大人なんてバカにしか見えないですよ。必死に表面だけ取り繕って。可愛いインコだって車に轢かせれば汚い羽の塊になるんです。可愛い猫だってお腹を切り裂けば汚い臓物がはみ出るんです。ごまかしたってバレるんですよ。誰だっていつかは絶対死ぬんですからね。

でもお祖父様は嫌いじゃなかったな。正直だから。欲望しかないんだもん。ボケてるのに、わたしのこと触ってるときは目がぎらついてて。変な幻想抱いてないところは気持ちよかったです。口ふさいだタオルもよだれと痰ですごかったけど、もともと汚かったですからね。死んでなお汚いお祖父様は一貫して立派だったと思います。

わたし、けっこうモテるんですよ。でも愛してるとか、好きだとか、可愛いとか言われると引いちゃうんですよね。やりたいってはっきり言えば良いじゃないですか。とどのつまりはそれが目的なわけでしょう？　そういうエクスキューズはいらないって思うんですよね。

（一季を見ながら）前、姉にぞっこんの男の子がいて、姉もまんざらじゃなかったんですけど、横で見ててイライラしたから、その子とやっちゃったんですよ。簡単でしたよ。だって向こうはやりたくて仕方ないわけですから。やらせない姉がおかしいんですよ。姉、いまだに処女ですよ。信じらんないですよ。それから姉とはぎこちないんです。口では「よくあることだから」とか言ってんですけど、内心そうじゃないのは顔見りゃわ

かるし。わたし、姉に教えてあげたいんです、わたしが悟ったことを。でも姉はどこまでも抵抗するんです。金切り声あげて怒り狂えば良いのに、どこまでも寛大であろうとするんです。いまだってそう。わたしがお祖父様を殺したってわかってるのに告発しようともしない。イライラするんですよね。姉の仮面を引きはがしてやりたくなるんですよ。姉さん、お祖父様を殺してあげたんだから感謝してよね。

一季　誰が……！？

佐季　でもいなくなってホッとしたでしょ？

一季　……。

佐季　正直になんなよ。みんな喜んでんじゃん。

一季　もっと他にやり方はあるんじゃないかな。

佐季　それが見つからないからみんなイヤな思いしてお祖父様を生かしておいたわけじゃない？

一季　でもあんたのやり方は安易だと思う。

佐季　（会場に）ね？　姉だけじゃないです。（まわりの者たちに）この人やこの人やこの人の内心をさらけ出してやりたくなるんですよ。猫が臓物さらけ出したみたいに、この家の膿をひねり出したいんです。腐った汚いものがにじみ出てくるのが見たいんです。それ見て言ってやりたいんですよ。わたし、はじめっから知ってたよって。あんたら馬鹿じゃないのって。なに必死に隠そうとしてたのって。たぶん冬子叔母さんもおんなじ気持なんじゃないのかな。あ、もちろん怪文書もわたしです。会社も振り回してやりたいんです。この家のことが洗いざらい書いてあります。ここだけの話、冬子叔母さんて――。

夏彦　冬子のことは忘れろ。

六、

照明戻って――。

御子柴が帰った後、しばし家族会議がおこなわれていたらしい。

佐季　え？

夏彦　冬子のことは考えても仕方ない。あいつは家を捨てた。もう家族じゃない。

秋良　やけに冬子を遠ざけたがんじゃない。なに、その怪文書に冬子のことでも書いてあんの？

夏彦　（答えず）……。

秋良　図星……ねえ、なにが書いてあんのよ？

夏彦　気安く言えるようなことじゃない。

秋良　どうせわかりきったことでしょう？

夏彦　そうでもない。

謙人　わかりきったって、冬子叔母さんとお祖父様のことですか？

夏彦　謙人！

佐季　怒鳴るようなこと？　みんな知ってんでしょ？

春野　冬子はね、あなたたちのお祖父様を誘ったんです。あんなふしだらな女は出て行って当然です。

大助　春野さん、よしましょうよ。子供の前で。

一季　冬子叔母さんはそんな人じゃないです。

春野　わかったようなことを言うんじゃありません。

秋良　別に秘密でもなんでもないんだからさ、親父は死んだし、隠す必要もないんじゃないの？

夏彦　そういう問題じゃない。
秋良　じゃあどういう問題（よ）……。

投げ込まれる紙に包まれた石つぶて。

それはまた庭に転がり――。

保雄、駆け出ていく。

夏彦　保雄君！　待て！

夏彦、追って急いで駆け出ていく。

大助　（石を拾い、紙を広げて）なんだろうね、これ。

と皆に見せる。

学生服姿の少年のバストアップ写真が引き伸ばされたもの。

顔のあたりに「淫」という字が書かれていて、人相がわからない。

秋良　便所の落書きだわ。
佐季　これでわたしじゃないってわかったでしょ？
秋良　どういうつもりか知らないけど、こんなもん脅しになるかっつの。
大助　脅しじゃないかもしれませんよ。

秋良　は？

大助　よくわかりませんけどね。脅しだったら今の時代、いろいろやり方があるんじゃないのかなあ。

謙人　いやがらせにしちゃ原始的ですよね。

大助　（紙をしげしげと見て）そうねえ……。

春野　そんなことでこの家は揺らぎませんよ。父が死のうが、この人（笙子）たちが何しようが、この家はつづくんです。いままでも何度もあったんです。そのたびに苦労したんです。でも乗り越えてきたんです。あなたたち、この家に生まれてきたことを幸せに思った方が良いですよ。どこの家ももろいのに、この家はこんなに強い！　それをあなたたち（三兄妹）が守っていくんです。いまはそうは思えなくても、あなたたちに子供が出来る頃には感謝しているはずです。わたしはこの家に生まれて本当に良かったと思ってる。だって幸せなんだから。父はこの家に生まれたことを感謝しなかった。だからあんな死に方をしたんです。冬子だってそうです。あれもろくな死に方はしませんよ。わたしはね、あなたたちにそんな風になってほしくないの。わたしのような幸せな人生をまっとうしてほしいの。ここにいるかぎり大丈夫だから。この家に生まれたことを信じて、強く生きてほしいの。わかった？

謙人　……お母さん、でも僕たちからするとね、お祖父様や冬子叔母さんや笙子叔母さんも全部ひっくるめてこの家なんですよ。あんまり幸せ感じないんですよね。

春野　それはおまえの心が弱いからそうなるんです。

大助　春野さんは見たいものしか見ない人だからね。

夏彦が息を切らして戻ってくる。

大助　どうだった？
夏彦　とても追いつけないです。足が速くて……。
秋良　なに、冬子じゃないの？
夏彦　男だった。

大助、紙を見せる。

夏彦、受け取って見て、

秋良　投げた本人とか。
夏彦　……意図がわからないな。
大助　嫌がらせにしても目的がね、よくわからないよね。
夏彦　部長に任せましょう。

保雄、戻ってきて、

保雄　（荒く息をついて）……見失いました。
春野　（ぽつりと）役立たずが。
秋良　（あえて大声で）役立たずだって！
夏彦　二人ともよさないか。
春野　役立たずは役立たずでしょう？
秋良　事実そうだからさ。
保雄　だったらあんたらが見つけてくれれば良いだろう……！
春野　なんですか、その態度は！
保雄　お義姉さん。こちらの我慢にも限度があります。言ってることがメチャクチャだし、そんな理不尽が通用する時代でもないですよ。
春野　何が理不尽ですか、小賢しい。

保雄　いいかげん病院に行った方が良いんじゃないですか？
大助　保雄君、この人は病院に行ってもこうなんですよ。
保雄　入院させた方がいいってことです！
春野　なんで私が入院しなくちゃならないんですか。あなた、頭が
　おかしいんじゃないの？
保雄　おかしいのはあんたですよ！
大助　保雄君、最近は法律が変わってね、ああいう病院は本人の意
　志がないと入院させられないんだよ。
保雄　会社のコネを使えばなんとかなるはずです！　こんなキチガ
　イのさばらせておく必要はない！
大助　言い過ぎ。僕の奥さんですよ。
保雄　知ったことか！
夏彦　落ち着けよ、保雄君。
秋良　（笑って）サイコーだね、あんたちょっと見直したわ。
保雄　ふざけるな。おまえみたいな女と結婚してどれだけ後悔した
　と思ってる。
秋良　それが本音かよ！
保雄　ああ。おまえの顔を見るだけで反吐が出そうだよ。
春野　秋良、別れなさい。こんな種なし。
秋良　種はあんのよ。やってないだけ。
保雄　誰が寝るか、おまえなんかと。
秋良　新婚時代はあんなに欲しがったくせに。毎日毎日犬みたいに
　やりたがったくせに。
春野　それで出来ないんだから種なしなのよ。
秋良　出来たの。すぐ堕ろしたんだよ。
保雄　……え？
秋良　すぐに妊娠したんだけどさ、あんたの子供産む気にならなく
　て堕ろしちゃった。ごめんねー。

保雄　……ごめんねで済ますのか？　堕胎ってのは命を奪うことなんだぞ、この人殺し！
笙子　やめてください！

一同、静まる。

笙子　……お葬式の日にする話じゃないです。もうやめてください。
一季　……わたし、家を出ます。もうここにはいられないです。家を出ます。
春野　あなた、何を言ってるの？
一季　いつか出たいと思ってました。もう限界です。
謙人　アテはあるのか。
一季　友達の家にお世話になって……バイトしてお金を貯めます。
春野　許しませんよ。
一季　悩みました。逃げるみたいで、捨てるみたいで……でも出ます。この家にいると、私の大切にしているものが守れなくなりそうなんです。怖いんです。
大助　父親としては出してあげたいところだけどね、一季、そうは言っても実家は楽だよ。お金の問題は切実だからね。
一季　お父さん、わたし、今そういうことを考えられないです。
夏彦　行かせてやればいいじゃないですか。冬子みたいに縁を切ってわけじゃなし。ただな、今はまだダメだ。この一件が落ち着くまではダメだ。わかったな？
一季　すぐにでも出たいです。
夏彦　ダメだ。そこはわきまえろ。
一季　いつ落ち着くんですか？
夏彦　さあ……それはわからん。
春野　出て行くのなら勘当ですよ。冬子と同じですから。

大助　そこは大目に見ようよ。
春野　あなたは甘いんです。家を出る人間は家の敵です。
一季　かまいません。敵で良いです。
秋良　立派、立派。二十歳の子がここまで考えてんだからさ、三十八のあんたもとっとと出て行きなよ。
保雄　行かないよ。ここにいる。ここでおまえたちと闘うよ。
秋良　闘うって……

けらけらと笑う秋良。

保雄、土足のまま部屋に上がり、秋良を平手で打つ。

秋良　なにすんの（よ）！

打つ。打つ。打つ。殴る。

秋良　やめてったら！

容赦なく殴り、蹴る保雄。

春野　よしなさい、この気狂い！
保雄　キチガイはおめえだっつってんだよ！

と殴る。

春野　（悲鳴）
保雄　キチガイはキチガイらしくおとなしくしてりゃ良いんだよ！
大助　おい、いいかげんにしろよ！

夏彦　保雄君！
保雄　邪魔したらあんたたちも容赦しねえぞ。
男たち、止まる。
春野に暴力を振るいつづける保雄。
やがて、
保雄　一季ちゃん。俺も我慢してきたけどさ、けっきょくこういう連中は力で屈服させるしかないんだよ。見ろよ、このザマ……みじめなもんだよ。
春野　訴えますよ……！
保雄　どうぞ訴えてください。部長がもみ消してくれるんじゃないですか？　おまえら、これからは今まで通りに行くと思うなよ。俺は怒った。頭に来た。それ相応の報いは受けてもらう。
と秋良に暴力を振るい、
保雄　おまえが俺を傷つけた分、おまえに傷ついてもらう！　おまえが俺に地獄を見せた分、おまえに地獄を見せてやる……！
佐季　……カッコいい。
保雄　（じっと睨んで）……。
佐季　……ごめんなさーい。
保雄　おまえたちも義姉さんにつらく当たるとこうなるぞ。わかったな？
謙人　はい、わかりました。
佐季　もうしません。

保雄　（笙子に）これがぼくなりの気持ちの示し方です。軽蔑しますか？

笙子　……近寄らないで。

保雄　（ため息ついて）……仕方ないですね。でもお義兄さんのように何もしないよりはマシだと信じています。

夏彦　保雄君……残念だよ。

保雄　どういう意味ですか？

夏彦　……残念だ。

一季、ふいに立ち上がり、母屋の方へ。

謙人　……出てくのか？

一季　……誰の顔も見たくない。

と退場。

場内暗くなり、スポットが謙人に当たる。

七、

謙人、会場に向けて語り始める。

他の一同は退場していく。

謙人　保雄叔父さんの人格が豹変したことで、ここは暴力が支配する家になりました……と言えばわかりやすいんですが、現実はそうでもありませんでした。

佐季、謙人の着替えを持ってやってくる。

佐季　保雄叔父さんはあの通りなんだけど、まわりがね。

謙人　ありがと。おまえは着替えなくていいのか？

佐季　わたしはあっち（はなれ）で。

佐季、はなれに入っていく。

謙人、その場で着替えながら、

謙人　まあ逃げ足が早いというかなんというか、まず秋良叔母さんが、

荷物をまとめた秋良が登場する。

謙人　旅行ですか？

秋良　そ。当分帰ってこないからそのつもりで。じゃ。

と退場していく。

謙人　（見送って）まあそうなりますよね。母は部屋にこもりきり。一季も引きこもって出てこない。父や夏彦叔父さんは普通に会社に行って、帰ってきてのくりかえし。いちばん吃驚したのはね、

大助、夏彦、保雄が笑顔で並んで入ってきて、そのまま退場していく。

謙人　何事もなかったかのようなんですよ。これには参りました。なにがあっても日常を変えようとしないこの力はなんなんだろう。とはいえ保雄叔父さんはどうかしています。毎日母の部屋の前に立って、じっと見下ろしてるんですよ。

保雄、登場して、奥の座敷を見ている。

謙人　それで母が何か言うと、

春野の声　いやらしい……！　とっとと出て行きなさい！

座敷の中に踏みこんでいく保雄。

春野の悲鳴が聞こえてくる。

謙人　母に暴力を振るうんです。おかげで母は以前よりおとなしくなりましたが、まあ性格はそんなに変わってないです。タフで

すね。いちばん気の毒なのはやはりこの人かもしれません。

笙子が出てくる。

そこへ来る保雄。

笙子、目を伏せて通り過ぎようとする。

その前に立ちふさがり、

保雄　お義姉さん。僕の気持ちわかってますよね？

笙子　退いてください。

保雄　（退かず）ずっと好きだったんです。

笙子　ごめんなさい、わたしそういうつもりはないですから。

強引にくちづけようとする。

抵抗して振りほどく笙子。

保雄　……あきらめませんよ。

笙子、逃げるように離れる。

そこで夏彦と鉢合わせになり、保雄は退場する。

夏彦　おまえ、我慢しないで良いんだぞ。

笙子　……どういう意味ですか？

夏彦　保雄君と寝たらどうだ？

笙子　なに言ってるの？
夏彦　子供も作ってくれてかまわない。俺の籍に入れれば良い。
笙子　ごめん、わたし意味がわからない。
夏彦　俺はな、この家の血が流れた人間をこれ以上増やしたくないんだ。あのガキどもを見てみろ。あいつらは人間じゃない。この家の血には、ああいう連中を生み出すものが混じってるんだ。俺の子は産むな。おまえのためだ。保雄君のような余所の人間と子供を作れ。その方が幸せになれる。
笙子　……どうかしてる。
夏彦　おまえはわかってない。おまえはこの家の血がどれだけ汚れているかわかってないんだ。
笙子　わたし、あなたが好きで結婚したんです。血がどうとか、家がどうとか、そんなことは二の次です。あなたが好きなんです。あなたの子供がほしいんです。
夏彦　……わかってくれよ。俺は怖いんだ。それだけなんだよ。
笙子　わかりません。私のことが好きなら、いま言ったこと謝って。
夏彦　……。
笙子　謝って。謝れないの？

何も言わずにその場を去る夏彦。

謙人　やっぱ笙子叔母さんは悲劇の人ですね。

笙子、退場。

謙人　怪文書の方は動きなし。そりやそうですよね、佐季がやってるんですから。
佐季　（はなれの中から）５ちゃんにも書き込んだんだけど、クソ

スレ扱いされて沈んじゃった。

謙人　石はまた飛んできました。

紙に包まれた石つぶてが飛んでくる。

謙人、それを拾って広げると、どこの誰とも知らぬ中学生のバストアップの写真が荒くコピーされたもの。

謙人　誰なんでしょうね。もはやなんだかわかりません。

御子柴が現れ、

謙人　（石と紙を渡して）紙は御子柴部長にお預けしたので、そのうち真相を突き止めてくれるんじゃないでしょうか。

御子柴、退場。

謙人　この家の空気は停滞してしまいました。何かが起きると、人は皆冷静に対処しようとする。花火は上がってもすぐに消える。祭りもいつかは終わる。

佐季　だったらまた何かを起こせばいいんだよ。

謙人　なにやるんだ。今度は母さんを殺すのか？

佐季　それはない。芸がなさすぎ。

謙人　じゃあどうすんだ。

佐季　考え中。

謙人　けど事態は僕たちの思いもよらぬ方向から進展することになりました。

一季が出てくる。すこしやつれている。

一季　……電話があった。夏彦叔父さんが会社の屋上から飛び降りたって。

佐季　（はなれから出てきて――着替えは済んでいる）えっ、自殺！？

一季　そう……即死だって。

佐季　へええ……超意外。

一季　どうして？

佐季　自殺なんかしそうにない人だと思ってたけど。

謙人　え、じゃ、どうすんだ、また喪服に着替えなきゃなんないのか？

佐季　大丈夫。次の場は葬儀の数日後だから。

謙人　よかった……俺スーツ苦手なんだよな。

一季　（その様子を見て寂しく笑う）

謙人　なんだよ。

一季　叔父さんが自殺したこと、なんとも思ってないのね。

佐季と謙人、顔見合わせ、

謙人　思ってなくもないぞ。

佐季　ただ悲しいとかそういうことはないよね。

一季　……ほんとどうかしてる。わたしは悲しいよ。叔父さん、良い人だったし、笙子さんのこと考えると悲しくなる。

佐季　へええ……そういう風に考えるんだ。

一季　誰にもぶつけられなくて、自分にぶつけるしかなかったんだよ。自分で自分のことをなくしてしまいたかったんだよ。なんかわかる。

佐季　わたし、自殺だけはイヤだな。なんかもう完全に負けた感じするじゃん。

一季　……それもわかる。死ぬくらいなら誰かに何かをぶつけた方が良いと思う。夏彦叔父さんのこともわかるし、保雄叔父さんのこともわかる。

謙人　俺はどうだろうな。

佐季　どっちもイヤ。わたしならもっと上手くやる。

一季　わたしは……わからない。自分のことがよくわからない。

謙人　（会場に）夏彦叔父さんの死は僕たちの心になんとなく影を落としました。あんまり僕たちのことを快く思っていなかったあの叔父さんが自殺することでこんなにしんみりするなんて。僕自身意外なことでした。

佐季　しんみりとはちょっとちがうんじゃないの？

謙人　じゃあなんだよ。

佐季　うーん……とにかくわたしはそんなんじゃないから。いっしょにすんのはやめて。

一族の者たち姿を現し、それぞれに席についていく。

謙人　夏彦叔父さんの葬儀の三日後に、家族に招集がかけられました。御子柴部長が意外な人を連れて来たんです。

八、

照明が点く。

春野、大助、笙子、秋良、保雄、そして三兄妹が揃うなか、御子柴が冬子を伴って入ってくる。

じっと見ている一同。

御子柴　お待たせいたしました。（冬子に）さあどうぞ。

空席に腰を下ろす冬子。

御子柴　お疲れのところ、まことにもうしわけございません。今回の件、わたくしどもも突然のことで驚いております。

春野　なぜその話にこの女が必要なんですか。

御子柴　冬子さんはどうしても必要な方です。

春野　（鼻で笑い）汚らわしい。

保雄　お義姉さん、言葉が過ぎるんじゃないですか。

春野　（顔をそらし）……。

御子柴　例の怪文書の件で、内容を知りたいと笙子さんから強い要望がありました。夏彦さんは生前、ぜったいに内容を明かさないでおいてほしいと言っていたものです。

内ポケットから折りたたまれた数枚の紙を取り出す。

笙子　亡くなる何日か前に、変なことを言いだしたんです。保雄さ

んと子供を作れ、その方がおまえのためだって。この家の血は汚れてる、これ以上その血が流れた人間を増やしたくないんだって……たぶんその怪文書に書かれていることと関わりがあるんじゃないかと思うんです。

秋良　へえ。あたしはかまわないわよ。こんなDV男、いくらでもくれてやるわ。

御子柴　わたくしどももこの内容について調べて参りました。夏彦さんのご遺志には反しますが、わたくしはこの内容を皆さんにお教えすべきだと思っております。

大助　部長、それって本当に意味があることなんですよね？

御子柴　あると思います。

大助　なんかもうこれ以上家の中をかき回されたくないなあと思ってるんですよ。さすがに疲れました。

御子柴　ご同情申し上げます。ですが、皆さんの心の整理には必要なことではないかと考えました。

春野　部長さんに責任は取っていただきましょうよ。夏彦だって、どうせあなたに追いつめられたんでしょう？

御子柴　（広げて）読みます。「美樹本製薬の皆様におかれましては、創業者一族についていかがお考えになっているのか、ぜひうかがってみたく存じます。会長、美樹本清造は女道楽が激しく、その子供たちである春野、夏彦、秋良、冬子もみだらな血を受け継ぎ、長女春野の三人の子供たちは皆父親が違い――」

春野　やめなさい！　なんですか、そんなデタラメを……！

秋良　えー、姉さん、こんなのみんな知ってたことよ。

春野　この子たちはわたしがお腹を痛めて産んだんです！

秋良　だから父親がその能なしじゃないってことでしょ。（謙人たちに）良かったじゃない、ねえ？

大助　秋良さん、それはないんじゃないかなあ。たしかに僕は能な

しかもしれませんがね、れっきとしたこの子たちの父親ですよ。

秋良　（苦笑）

大助　（大声で）父親なんだ！

一同、静聴。

大助　……そこに書いてあることはデタラメだ。（子供たちに）良いね、おまえたち。

それぞれに黙っている三兄妹。

御子柴　「長女春野の三人の子供たちは皆父親が違い、次女秋良は複数名の男性と通じあい」、

秋良　事実でーす！

御子柴　「三女冬子は清造が愛人北見芳恵に産ませた子供でありながら、清造の慰みものとなり、その子を身ごもり、十代で堕胎の経験をし、傷心のまま家を捨て落魄した人生を送っておられます」

無表情に聞いている冬子。

御子柴　「この一族がかくも異常な状況に陥っているのは、すべて会長清造の行状によるところであり、したがって清造がなお生存している状況には異議を申し立てるほかはありません。近く清造が亡くなることを予告いたします。その鉄槌を下すのは身内によるものとなるでしょう。当方といたしましては清造の死が実現するよう、この場から祈りを捧げるばかりであります。かしこ」。（たたんで、佐季に視線を向けつつ）これを出した人

間についても目星がついていますが、それはあまり重要な問題ではありません。

佐季　（微笑んでその視線を受けている）

笙子　主人については何も触れてないんですね。

御子柴　順番にご説明申し上げます。まず専務ご夫妻の件ですが、これに関しては私どもが申し上げる立場にございません。先ほど専務が仰ったことがすべてではないかと存じます。

謙人　いまさら驚かないですよ。

佐季　似てないしね。胸のつかえがおりた気分。

秋良　親戚一同みんな知ってることよ。この人、昔はメチャクチャ遊んでたからさあ。

大助　よしましょうよ。僕、これ以上怒鳴りたくないんですよ。

御子柴　次に秋良さんの件ですが、これも私どもとしましては追究する気がございません。

秋良　それもみんな知ってることだもんねえ。

御子柴　最後に冬子さんの件ですが、夏彦さんはこれをいちばん気に病んでおられました。

秋良　なんで？　それもみんな知ってることなのに。

冬子　……これ、間違ってます。

一同、聞く。

冬子　わたし、堕ろしてません。

春野　嘘仰い。あなたがお父様を誘って、あなたがたらしこんで、勝手に妊娠した挙げ句に家を出て行ったんじゃありませんか。みんな覚えてることですよ。

冬子　だから堕ろしてないんです。産んだんです。もう中学生になります。

一同、驚きつつ沈黙。

御子柴　……冬子さん。夏彦さんとの関わり合いについてお話しいただけますか。

冬子　兄はわたしとあの子の生活の面倒を見てくれていました。家の人間として罪滅ぼしだって言ってましたけど、本当は優しい人だったからだと思います。主に金銭的な援助でしたけど、私生児だし、助かりました。

笙子　主人が、ずっとですか？

冬子　はい。

秋良　そのわりにはあんたのこと冷たく話してたけど。

冬子　わたしに近寄らせたくなかったんじゃないですか。

御子柴　夏彦さんが冬子さんに宛てた遺書があります。冬子さん、読んでいただけますか。

冬子　（取り出し、広げて読む）「冬子。俺はもう限界だ。生きることに疲れたし、意味が見いだせない。どうか許してほしい。美樹本の家がおかしくなったのは親父に始まったことじゃない。俺は調べた。親父の父親、つまり俺たちの祖父さんは自分の母親とまぐわって親父を産んだんだ。親父はそんな呪われた子供だったんだ。さらにさかのぼって調べたが、これ以上は書けない。美樹本の家は異常だ。最初に頼んだ興信所は途中で連絡がつかなくなったほどだ。だが俺がいちばん絶望したのは、祖父が囲った愛人の家系を調べたら、押川家、つまり笙子の実家につながったことだ。こんな偶然があるか。俺にも笙子にもこの淫らな血が流れているんだ。あの笙子に。俺はこの事実を知って以来笙子を抱いていない。笙子との間に子供など作れない。これ以上この血が濃くなることなど考えたくもない」

笙子　やめて。もう結構です。
冬子　遺書はまだつづいています。知りたくないんですか？
笙子　それ、主人があなたを信頼して託したのよね？　なんでこの人（御子柴）に見せたの？
冬子　わたし、兄さんには感謝してますけど、この家は恨んでますから。傷ついてほしいんです、この家の人に。この家がどれだけ人に害をもたらしてるか、思い知ってほしいんです。お義姉さん、わたしを責めても仕方ないですよ。わたしもお義姉さんもこの家の犠牲者なんですから。
御子柴　（紙を広げて）これは？

例の中学生の写真。

冬子　（見て）……息子です。彼がやったんだと思います。
大助　……息子さんは……どういうつもりでこんなことしたの？
冬子　わたし、あの子にこの家に対する恨み辛みを全部教えて育てましたから。自分がどういう生まれかもすべて知っています。あの子はこの家を憎んでいます。そんな人間がここにいるってことを主張したかったんだと思います。
大助　……ま、夏彦君も死にたくもなりますわな。
秋良　お義兄さん、他人事だね。わたしは子供作る気ないからいいけどさ。
春野　（別人のような態度で）産んだのなら言ってくれればよかったのに……こんなに冷たくあしらいませんでしたよ。あなた（笙子）も、この家の血が流れてるんなら、これからはちゃんと身内として扱ってあげます。（ぱあっと笑顔になり）なんだ、そうだったのね。すこし安心しちゃった。
御子柴　（笙子に）ご納得いただけましたか。

笙子　（沈黙）……。
大助　近く総会がありますけど、大丈夫なんですか、いろいろと。
御子柴　はい、私どもは楽観しております。ご心配いただかなくても大丈夫ですよ。
冬子　あの子に会いますか？

一同、冬子を注視。

冬子　連れてきてるんです。家の中に入りたがらないので、近くの喫茶店で会社の方に見てもらってるんです。
春野　わたし会いたい。大事な甥っ子だもの。
冬子　……姉さんだけですか。

一同、黙っている。

冬子　あの子はこの家の子です。この家があの子を作ったんです。だからわたしは産んだんです。あの子を見せつけてやるために。

一同、何も言えない。

冬子　（立ち上がり）それでも来たければ来てください。それじゃ。

と退場する。

春野　（嬉々として立って）わたしは行きますよ。
佐季　わたしも。
謙人　え、行くのか？
佐季　見たいじゃん。行こうよ。

謙人　……後学のために見とくか。
大助　僕は春野さんの付き添いで行きます。
秋良　わたし帰るね。
保雄　（胸ぐらつかんで）待てよ。
秋良　わたし、いまヤクザとつきあってんの。
保雄　……え？
秋良　うっそー。（保雄の額をぺしりと叩いて）じゃあね。（と退場）
保雄　（怒りをたたえて）……。
御子柴　課長。皆さんをご案内してください。
保雄　……はい。

保雄に先導されて退場していく春野、大助、佐季、謙人。

後に残った一季、笙子、御子柴。

御子柴　お二人はよろしいんですか？
一季　……はい。
笙子　……必要ありません。
御子柴　……お二人に折り入ってお話しがあります。すぐにこの家に見切りをつけて出て行った方がよろしい。
一季　……どういうことですか？
御子柴　近く株主総会があります。そこでクーデターが起きます。会社乗っ取りです。
一季　……御子柴さんはどういうお立場なんですか？
御子柴　私はクーデターを起こす側の人間です。
笙子　……いいんですか、そんな大事な話をわたしたちにして。
御子柴　この家はまともではない。彼らが人材として優秀なわけでもない。会社としてこれ以上彼らを擁するのは危険と判断いた

しました。

黙って聞いている一季と笙子。

御子柴　お二人はまだ若い。この家からお逃げなさい。家族の縁はお切りなさい。お二人はまだ人の心を失っていない。きっと幸せに生きていける場所があるはずです。それを探してください。

しばしの間の後――。

一季　……ありがとうございます。

笙子　……考えてみます。

御子柴、頷いて退場しようとするが、

御子柴　（ふと二人に向き直り）この家はもう終わりです。失礼いたします。

と一礼して退場。

残された二人。

疲れた顔でただ座っている。

ふいに照明が変わり、庭に佐季が現れる。

入れ替わりに二人は退場。

九、

会場に向かって語りかける佐季。

佐季　あの子、普通でした。もっとヤバい感じかと思ったけど、ほんと普通。冬子叔母さんは最後まで無表情だったな。ほんと何考えてんだろう、あの親子。やろうと思えばもっといろいろできるはずなんだけどな。わたしには理解不能だわ。

それから数日はなにごともなく過ぎました。でも――。

庭の奥から一季が出てくる。

物置がある方だ。

佐季　（鉢合わせになり）……どうしたの？

一季　……べつに。

と去る。

佐季　なんか様子がおかしいなって気になって。

家の中、一季と笙子が来る。

笙子、荷物をまとめている。

笙子　じゃあ、元気でね。

一季　笙子さんもお元気で。
笙子　（封筒を手渡して）ほんの気持ち。
一季　（受け取って見る）
笙子　わたしにできるの、これくらいだから。
一季　いいです、こんなの。
笙子　受け取ってよ。一人暮らしは何かと物入りだから。
一季　やめたんです。わたしもう必要ないから。
笙子　どうして？　家出ないの？
一季　……うん。
笙子　ダメだよ、絶対出た方が良いよ。一季ちゃんならなおさらだよ。よかったら、わたしといっしょに実家に来ない？　一人暮らしの準備が出来るまでいてくれてかまわないから。ね？
一季　……ちょっと時間がほしくて。
笙子　……わかった。なら受け取って。（と封筒を差し出す）
一季　……（受け取って）はい。
笙子　……じゃあね。なにかあったらいつでも連絡して。
一季　はい。

見送っている一季。笙子が去るとふいに真顔になり、表情硬いまま母屋へと去っていく。

佐季　わたし、いまのでちょっと気づいちゃったんです……それではこれで失礼。

と一礼して退場。

暗転。

十、

照明が点く。

夜。

灯油缶を持って奥から出てくる一季。

一季、庭に灯油缶を置く。

ふいにはなれから顔を出す謙人。

一季と灯油缶を見て、

謙人　なんだ、家に火でも点けるのか？

一季　うん。兄さん、逃げたら。

謙人　……なんで俺だけ逃がすんだよ。

一季　兄さんは子供なんか作らないでしょう？　秋良叔母さんといっしょ。

謙人　……失礼な。俺は逃げないよ。

一季　どうして？

謙人　やっとわかったよ。俺、死にたいんだ。なんでこんなに荒んだ気分になるのかって、そりゃ生きていたくないからだよ。死ねばすべて解決だよ。

一季　そう……じゃあ好きにして。

家の中に上がってくる一季。

謙人　でもこんなことしたって誰かは残るぜ。
一季　この家をなくさないと始まらない気がするんだ。それに、とりあえず佐季がいなくなればそれで良い。
謙人　あいつは？
一季　部屋で寝てる。
謙人　じゃあ俺、眠剤飲んで寝るわ。苦しまないで死ねると良いな。
一季　さよなら、兄さん。
謙人　さようなら……おまえのことは嫌いじゃなかったよ。

とはなれに入って戸を閉める。

一季、母屋の方にいったん消え、また戻ってくる。

奥から爆ぜるような音が聞こえてくる。

音響、いったん消えて、

一季　これでこのお芝居は終わりです。誰が死んで誰が生き残ったのか、その後みんなどうなったのか、そういうことは本来みなさんに伝えるべきことじゃないと思うんです。家族のことは家族が解決すべきだと思うから。安易に家族のことは外に出すべきじゃない、わたしはそう思います。わたしは家族が嫌いだったし、この家に生まれた自分が嫌いでした。そんな気持を押し殺して生きてきました。でも……もう我慢するのはやめようと思います。

わたしなりに何が出来るか考えてみました。結論がこれです。

人に迷惑をかけるけど、いままであんまり迷惑なんてかけたことなかったし、これくらい良いかって思いました。たぶん、わたしも家族も幸せになれるただひとつの方法です。特に妹はこうでもしないと救えないと思う。これであの子もやっと落ち着けるんだと思います。

一季の携帯に着信。

一季　（怪訝な顔で出て）……はい？
佐季（電話）　もしもし？　姉さん？
一季　……佐季？　いまどこ？
佐季（電話）　家の近く。煙が上がってるけど……やっぱ火ぃ点けたんだ。
一季　……どういうこと？
佐季（電話）　ああ、部屋で寝てたのはね、笙子叔母さん。縛ってベッドに寝かせといたの。布団めくって調べるんだったね。今頃生きながら焼かれてるよ。
一季　（言葉に詰まり）……どうして？
佐季（電話）　は？　そんなの決まってんじゃん。姉さんに殺させてやりたかったからだよ。あの人、良い人じゃん。でも良い人だからって報われるとは限らないって姉さんに教えてやりたかったんだよ。
一季　……許さない。
佐季（電話）　それでどうするの？　許さないだけ？
一季　ぜったいに許さない。
佐季（電話）　答えんなってないよ。どうするのって聞いてるの。
一季　……殺す。
佐季（電話）　え？　聞こえないんだけど。

一季　殺す！　おまえを殺す！
佐季（電話）　（楽しげに）そうだよ、姉さん。そう来なくちゃ。どうするの？　そのまま死ぬの？　わたしを殺さないでそのまま死んでいくの？
一季　……。
佐季（電話）　答えてよ、姉さん。どうするの？　どうしたい？　わたしここにいて姉さんを待ってるよ。姉さんがわたしを殺しに来るのを待ってる。
一季　……。
佐季（電話）　わたし、やりたいことといっぱいあるんだ。人の悲しむ顔や嘆く顔や怒った顔を見て、どこまでもどこまでもどこまでも生きてやろうと思ってるんだ。姉さん、そんなわたしを止めないの？
一季　……止めるよ。
佐季（電話）　生きてやろうと思わないの？
一季　あんたを探しに行く。
佐季（電話）　……わかった。またどこかで会おうね、姉さん。
一季　（切って）……こうしてわたしは死ねなくなりました。妹を殺すまで生きるしかなくなったのです。
佐季　（同じく電話を切って）わたし、この家に生まれてよかった……！

一気に炎上する美樹本家。

暗転。

（了）